中国常熟の住空間および地域空間の構成と変化の仕組み

— 圩子が創出する水環境との関係から —

MECHANISM OF ORGANIZATION AND CHANGE OF LIVING SPACE AND
REGIONAL SPACE IN CHANGSHU, CHINA

Based on relation of water environment created by wei-zi

栗原 伸治*, 糸長 浩司**, 桑原 志乃***, 川口 友子****
Shinji KURIHARA, Koji ITONAGA, Shino KUWAHARA
and Tomoko KAWAGUCHI

The purpose of this paper is to clarify the organization and the change of the living space and the regional space in Changshu, China, and also to clarify the mechanism of them, from the viewpoint of the relation to wei-zi that creates water environment, by literature and fieldwork.

In conclusion, it can be clarified as follows: 1. The regional space of Changshu can be divided two areas, according to whose spatial organization is changing (Green and Soil Area) or not (Water Area); 2. Wei-zi (圩子) can be grasped “圩子”, and the water environment of Water Area can be grasped “Water Society” formed through the medium of wei-zi; 3. From the relation between 1. and 2., the mechanism of organization and change of the living space and the regional space in Changshu can be clarified; 4. And it can be said that the living space and the water environment created by such mechanism create and organize the regional space and the water environment in Changshu. In other words, the regional space and the water environment in Changshu are reproduced by such mechanism with changing.

Keywords : *Changshu in China, living space, regional space, organization, mechanism, wei-zi*

中国常熟, 住空間, 地域空間, 構成, 仕組み, 圩子

1. はじめに

1-1 背景と目的

中国江南は、水郷地域として知られている。江蘇省の南部、太湖と長江のあいだに位置する常熟においても、豊かな水環境がみられ、「常熟人の生活にとって、水はあらゆる面で切っても切れないものである。(中略) 常熟文化もあらゆる面で、江南の沼沢とは密接な関係があって、不可分である」^{註1)}とされている。また、常熟をおとずれた現在の文人はみな、『『遠い山と近くの水が、すべておもしろく趣がある』という共通した感想をもつ」^{註2)}、とも言われている。このような常熟の豊かな水環境を構成する要素として、大小の河川の水と、大小の湖、沼、沢の水、さらには井戸水があげられる^{註3)}。湖、沼、沢に関しては、「湖(hu)」、「蕩(dang)」、「塘(tang)」、「面(mian)」、「圩(wei)」、「潭(tan)」^{註4)}などと呼ばれるものが点在している。それぞれにおいて、水は面的な広がりを見せており、面的なそれらをつなぐ水路が線的にはりめぐされている。そして、交通路としても利用されている水路は、住空間および地域空間の構成に大きく影響を与えてきた。しかしながら、近年、「都市化」やそれを促す計画によって、常熟の住空間や地域空間の構成が大きく変化しつつあり、同時に水環境も大きく変化しつつある、と言われている。

本稿では、文献調査と現地調査^{註5)}にもとづき、中国常熟の住空間および地域空間の構成と変化の実態を把握し、また水環境を創出する「圩」に着目して、その口語的な「圩子(wei-zi)」という呼称に関する解釈をおこなう。そのうえで、構成と変化の実態と圩子が創出する水環境との関係から、住空間および地域空間の構成と変化の仕組みについて考察してゆくことを目的とする。

1-2 方法と展開

そのために、まずは既往研究にもとづいて、常熟のエリア分類に対応した住空間の構成と変化の実態を、かつての交通路である水路と、現在主要な交通路になりつつある道路^{註6)}の関係から把握する。そして、それらをもとに、地域空間の構成と変化の実態を把握する。つぎに「圩」の口語的な「圩子」という呼称自体と、その呼称がもつ文化的・社会的側面についての解釈をおこなう。そのうえで、構成と変化の実態と圩子が創出する水環境との関係から、常熟の住空間および地域空間の構成と変化の仕組みについて考察してゆく。

1-3 位置づけと意義

地域環境計画にとって、地域空間の構成と変化を把握することは重要であり、とくに建築学的なアプローチの場合には、住空間から地域空間の構成と変化をみるという視点が重要になってくる。また、その構成と変化の仕組みについて、「伝統的」な社会システム等と

※本稿は、文献1)~3)をもとに加筆・修正したものである。

• 日本大学生物資源科学部生物環境工学科
専任講師・博士(学術)

** 日本大学生物資源科学部生物環境工学科 教授・工博

*** (術)プリムローズ

**** 日本大学大学院生物環境科学専攻
博士後期課程・修士(生物資源科学)

Lecturer, Dept. of Bioenvironmental and Agricultural Engineering, Nihon Univ., Ph. D.

Prof., Dept. of Bioenvironmental and Agricultural Engineering, Nihon Univ., Dr. Eng.

Primrose

Graduate Student of Natural Environmental Studies, Nihon Univ., M. Bioresource Sciences

の関係から理解することは、人間と人間が創り出す地域環境との関係の共通性と多様性に関する理解にもつながると考えられる。

これまでも、住空間および地域空間の構成や変化を、実態として把握するだけでなく、文化的に継承されてきた社会システム等との関係から考察した研究は数多くみられる。なかでも、中国の江南地域を対象とした研究では、水と密接に結びついて形成された鎮の都市空間を歴史的視点から考察した高村の一連の研究⁷⁾、歴史的空間形態という概念から空間形態の変容メカニズムを明らかにした王らの研究⁸⁾、絵図資料を中心に清代の水辺都市空間について考察した盧らの研究⁹⁾などがある。しかしながら、高村の研究は、歴史的・社会的背景との関係から、戯台と演劇空間、住居の形式とその機能などについて考察しているものの、その仕組みというダイナミズムをあつかったものではない。盧らの研究でも、空間と経済や生活との関係についてはふれているものの、その仕組みというダイナミズムはあつかっていない。王らの研究では、空間形態の変容メカニズムというダイナミズムをあつかっているものの、歴史的変容をうながす条件自体や、文化的に継承されてきた社会システム等の存在自体に対する解釈はおこなっていない¹⁰⁾。また、いずれの研究も、鎮や旧市街地などの都市空間を対象にしたものである。いっぽう、文化的に継承されてきた社会システムでもある圩子¹¹⁾に関する既往研究¹²⁾は、それと、住空間および地域空間の構成や変化とを結びつけるものではない。

これらに対し、本稿では、農村部を中心とした住空間および地域空間の構成や変化の実態と、文化的に継承されてきた社会システムに関する解釈とを結びつけて、空間の構成と変化の仕組みというダイナミズムについて考察する。すなわち、本稿には、地域環境計画の基礎研究という位置づけとともに、発生構造主義的な観点¹³⁾を視野にいれつつ、いわゆる「異文化理解」に向けた基礎研究という位置づけがある。

1-4 常熟の概要とエリア分類

常熟は、上海の北西約80kmに位置し、長江の南岸に接している。「総面積1,264km²、市街地の面積56.8km²、人口124万人で、1986年には国务院より国家歴史文化名城に選定された」¹⁴⁾。同济大学李京生研究室では、常熟の地域空間を、地形条件や社会的な状況により3つのエリアに分類している¹⁵⁾ (図1)。そのエリア分類と各エリアの特徴は、以下のようにまとめられる。

図1 常熟のエリア分類

(1) 緑が多いエリア (以下、緑エリアと略記)

海拔5~6mと、この地域のなかでは比較的高いところが多い。樹木も比較的多く、樹木は集落間のところどころに密集している。農地は水田が中心であるが、畑地として利用している場合もみられる。集落は、水路に対してクラスター状に面的に構成されている。

(2) 畑が多いエリア (以下、土エリアと略記¹⁶⁾)

海拔がおおよそ3~4mのところが多い。農地は畑地が中心であり、集落内外に広がっている。工業エリアでもあり、繊維工場が数多くみられる。近年では、国際港の常熟港が長江沿いに新設され、繊維工場にかかわって、日系企業の大規模な電子機器工場なども増加してきている。ここの集落は、水路に沿って線的に構成されている。

(3) 湖沼が多いエリア (以下、水エリアと略記)

海拔2m以下のところがほとんどであり、この地域のなかではもっとも低いエリアである。湖沼が面的に広がって、水田や魚・エビの養殖池も数多くある。そして、それらをつなぐ水路が線的にはりめぐされている。集落は、その水路に沿って線的に構成されている。

なお、常熟の水路網における水の流れはおおよそ、長江から流入し、緑エリア、水エリア、土エリアをとって、ふたたび長江へ、ひじょうに緩やかに流出するというものである。長江からの流入口と長江への流出口との標高差がほとんどないからであるが、そのために、各エリアにおける水路の様子も異なっている。低いところが多い水エリアでは、地面と水路の水面との高さがあまり変わらないため、水路沿いには堤が築かれていることが多い。それに対し、緑エリアと土エリアでは、そのような堤はほとんどみられない。

2. 住空間および地域空間の構成と変化

2-1 調査対象集落の選定と概要

各エリアから主要な水路・道路の双方に近い村を選出し、その村内において調査対象集落を選定した。なお、その選定に際しては、地域環境計画(案)づくりのため、長年、常熟において現地調査をおこなっている同济大学李京生研究室の助言を得るとともに、筆者らも現地における網羅的な視察調査をおこなうことにより、各エリアでの特徴的かつ典型的な集落を選定した。

緑エリアでは、長江から常熟の南西へと流れる運河と、中心市街地の周囲をまわる幹線道路との接点に位置する東南村を選出した。調査対象集落は、これらの主要な水路・道路との接点にもっとも近い大圩里集落を選定した。大圩里集落には、住居は約100軒あり、集落の東部を流れる運河から枝分かれした水路が集落内部を東西方向に流れ、集落中央ではその水路の幅が一部広がった池のような空間(以下、池と略記)がみられる。かつて、住居を建設するときには、船で建築材料をこの池まで運んできたという。また、この池で泳いだり、この水を生活用水として利用したりしていたともいう。しかしながら、現在は、農機具を洗う程度にしか、この池は利用されていない。

土エリアでは、常熟港、および常熟港と中心市街地をつなぐ主要な運河と道路の近くに位置する越園村を選出した。調査対象集落は、水路が合流する李家宕・藩家宕集落を選定した。ここの水路は、長江へ流れ出る運河から枝分かれした水路であり、合流したあとは、ふたたびこの運河へとつながる。住居は、李家宕集落には16軒、道路をはさんだ藩家宕集落には7軒ある。ここでも、かつては水路

表1. 住空間および地域空間の空間レベル別の構成

構成 空間 レベル	面的	線的	⑤地域空間
エリア (李京生研究室 による分類)	<p>(1) 緑エリア</p> <p>水路に対して集落が面的に構成</p>	<p>(2) 土エリア</p> <p>(3) 水エリア</p> <p>水路に沿って集落が線的に構成</p>	<p>面的 線的 線的</p>
①住居 N	<p>相対方位</p> <p>李家宕・潘家宕(2)</p> <p>水路を背にして、もしくは道路に向かって配置 新しく建てられた住居</p>	<p>絶対方位</p> <p>大圩里(1)</p> <p>新しく建てられた住居は、道路に沿って配置</p> <p>天潭・横河(3)</p> <p>水路に沿って南向きに配置</p> <p>※図中の一は入口（大門）の位置を示す</p>	<p>絶対→相対 相対 絶対</p> <p>緑・土エリアの新しく建てられた住居は、道路に対して相対的に配置されている</p>
②住居群	<p>大圩里(1)</p> <p>池周辺に面的に構成されているが、新しく建てられた住居群は道路に沿った線的な構成</p>	<p>李家宕・潘家宕(2)</p> <p>水路、または道路に沿って線的に構成 新しく建てられた住居群</p> <p>天潭・横河(3)</p> <p>水路に沿って線的に構成</p>	<p>面→線的 線的 線的</p> <p>緑・土エリアの新しく建てられた住居は、道路に沿って線的に構成されている</p>
③集落	<p>大圩里(1)</p> <p>池の周辺に面的に構成</p>	<p>李家宕・潘家宕(2)</p> <p>水路、または道路に沿って線的に構成</p> <p>天潭・横河(3)</p> <p>水路に沿って線的に構成</p>	<p>面的 線的 線的</p>
④集落群	<p>東南村(1)</p> <p>池の周辺に面的に構成</p>	<p>越園村(2)</p> <p>水路・道路沿いの線的な集落が集まって面的な構成になりつつある</p> <p>珠逕村(3)</p> <p>水路に沿って線的に構成</p>	<p>面的 線→面的 線的</p> <p>土エリアは道路沿いに集落が形成することで集落群が面的に拡大している</p>

①～④の図面は、現地調査時の実測をもとに筆者らが作製

を交通路として利用し、また水路の水を生活用水として利用していたが、現在は、汚物を処理するときぐらいにしか使用していない。

水エリアでは、上海へとつづく主要な運河・道路の近くに位置し、集落が主要水路によって囲まれている珠涇村を選出した。調査対象集落も、水路に囲まれた天潭・横河集落を選定した。ここの水路は、運河から枝分かれした主要水路からさらに複雑に枝分かれしたものであるが、いずれの水路もまたこの主要水路へ、さらにはこの運河へと通じている。天潭集落の住居は9軒、横河集落には14軒ある。ここでは、現在でも水路を交通路として日常的に利用しているため、足漕ぎの船、あるいは船外機をとりつけた船が頻繁に行き来している。

2-2 住空間の構成と変化

調査対象集落における住空間の構成と変化に関して、住居、住居群、集落、集落群という4つの空間レベルにわけたうえでみてゆくと、それぞれについて以下のことがいえる¹⁷⁾。

2-2-1 住居の構成 (表1の①)

大圩里集落(1)の住居は、いずれも住居敷地内への入口である大門が、水路とほぼ平行にのびた道路、あるいはその道路と直角方向の道路と接して設けられており、敷地の北側には主屋が南向き¹⁸⁾に建てられている。また、天潭・横河集落(3)の住居は、近くの水路の方向にかかわらず、入口はほぼ敷地の南側にあって、入口の対面、敷地の北側に主屋が水路に沿って南向きに建てられている。つまり、ともに、水路に沿って南向きに配置されており、水路の方向にかかわらず絶対方位にしたがっている。しかし、大圩里集落(1)において、人民公社解体後の1980年代半ば以降に新しく建てたと集落の人びとがいう住居は、新しく設けられた道路に沿いに入口を設けるものが多く、主屋もその道路に沿って道路と直角に建てられている。とくに、道路の北側に建てられた住居の主屋は、入口の正面、敷地の北側に南向きにすることが可能であるにもかかわらず、そのように建てられている。つまり、道路に対する相対方位にしたがっている。これらに対して、李家宕・藩家宕集落(2)の住居は、水路とほぼ平行にのびた道路に接して入口があり、その対面に主屋が水路を背にして建てられている。また、1980年代半ば以降に新しく建てたという住居も、水路とほぼ平行にのびた道路に接して入口があって、その対面に主屋が建てられている。つまり、水路・道路に対する相対方位にしたがっている。

2-2-2 住居群の構成 (表1の②)

大圩里集落(1)の住居群は、池を中心に面的に構成されているが、新しく建てられた住居群は、集落周辺の道路に沿って線的に構成されている。いっぽう、李家宕・藩家宕集落(2)と天潭・横河集落(3)の住居群は、水路に沿って線的に構成されている。しかし、李家宕・藩家宕集落(2)の新しく建てられた住居群は、水路ではなく、道路に沿って線的に構成されている。

2-2-3 集落の構成 (表1の③)

大圩里集落(1)の新しい住居群は、道路に沿って線的に構成されているが、道路が面的な構成の住居群を囲むようにつくられていることから、集落レベルでみれば、その構成は面的に拡張しつつあるといえる。いっぽう、李家宕・藩家宕集落(2)の新しい住居群は、水路に並行する新しい道路に沿った線的な構成だが、この住居群は線的な層をなしているため、集落は線的に拡張しつつあるといえる。

また、天潭・横河集落(3)では、現在も水路沿いに線的な構成の住居群が建てられているため、集落は線的に拡張しつつあるといえる。
2-2-4 集落群の構成 (表1の④)

東南村(1)の各集落には池があり、大圩里集落(1)と同様、各集落は池を中心とした面的な広がりをもつ。そのため、各集落が面的に拡張してゆけば、集落どうしが結合し、集落群としても面的な構成になると予想できる。また、越園村(2)では、水路沿いの集落間に新たな道路がつくられ、道路沿いに線的な層をなす住居群が建設されている。これにより集落どうしがつながって、集落群としては面的な構成へと変化しつつある。いっぽう、珠涇村(3)では、現在でも水路網が発達しており、集落および集落群は網目状の水路に沿って線的に拡張していくと考えられる。

2-3 地域空間の構成と変化

常熟では現在、道路の拡張整備がいたるところでおこなわれている。そのいっぽうで、かつては交通路としても利用されていた水路が減少しつつある。しかしながら、運河など主要河川が利用されていることと、そこから枝分かれした水路が集落に通じていることは、かつてと同様で変化していない。このことを考慮すれば、主要な水路と道路の近くに選定した本稿の調査対象集落から、各エリアにおける住空間の構成と変化、さらには、それらをもとにした常熟における地域空間の構成と変化についての考察が可能になると考えられる。

エリア別の調査対象集落における住空間の構成と変化からみた地域空間の構成と変化について表1の⑤に示す。ここからは、以下のふたつのことが読みとれる。

I. 水エリアの住空間の構成は不変である：

住居は絶対方位にしたがっており、住居の集合体としての住居群、および住居群の集合体としての集落の構成は線的である。

また集落の集合体としての集落群は拡大しつつあるが、線的な構成のまま拡大している。

II. 緑・土エリアの住空間の構成は変化しつつある：

緑エリアの住居は、絶対方位にしたがう構成から相対方位にしたがう構成へ、その集合体としての住居群は面的な構成から線的な構成へ、つまり土エリアと同様の構成へと変化しつつある。

この理由として、以下のことが考えられる。かつての緑エリアでは、建設という行為においても、空間構成においても、面的な池を中心にした面的な広がりがみられた。そのようななか、住居の向きは絶対方位にしたがうように規定され、住居群は池を中心に面的な広がりをもつように構成されていた。しかしながら現在では、道路が建設され、線的な道路が住居の向きも住居群の構成も規定している。そのために、住居は道路の方向という相対方位にしたがい、住居群は線的な道路に沿って線的に構成されるようになった。そして、結果として、緑エリアでは、土エリアと同様の構成へと変化がみられるようになったと考えられる。

また土エリアの集落群は、線的から面的へと、つまり緑エリアと同様の拡大の仕方へと変化しつつある。

常熟の地域空間は、現在、以上のような構成と変化がみられる住空間によって構成されている。そのため、このことによる地域空間自体の変化もうかがえる。

3. 圩子に関する解釈

前章で示したⅠとⅡは、水路と道路との関係からとらえたため、常熟をはじめ、江南の水郷地域の水環境を創出する「圩」，さらにはその口語的な呼称であり、文化的に継承されてきた社会システムとも関係する「圩子 (wei-zi)」と深くかかわりをもっていることが予想される。ここでは、次章において、前章で示した構成と変化の仕組みについて考察するために、そのキー概念となる圩子に関する解釈をおこなう。

3-1 圩子の概要

圩子とは、狭義には「(淮河流域・揚州などの地で) 水田や低地の周りの堤をいう：[围子] とも書く」¹⁹⁾と定義される。この狭義の圩子および圩子に囲まれた水田の雛型は、春秋時代にはすでにみられており²⁰⁾、またその原型は、元の王禎が著した『王禎農書』のなかで図とともに記述されている²¹⁾。

このように、古くから狭義の圩子および圩子に囲まれた水田がこの地域でみられる理由は、その自然環境にある。常熟およびその周辺地域は、ほとんどが「潮間帯」と呼ばれる海拔 0~6mの地帯であり、大雨で太湖が氾濫したときには、氾濫した水を長江へ流すための排水地域となっていた。そのため、ここでは沼や沢などが発達していったが、それらを利用しつつ狭義の圩子を築くことにより、いわゆるクリークをふくめた水路、そしてその水路や狭義の圩子に囲まれた水田なども築かれていった。つまり、圩子および圩子に囲まれた水田も、この自然環境を利用して発達していったのである。もっとも、その発達とは、時間軸のみに沿った一次元的なものではない。歴史的・社会的な環境におうじて、かたちを変えながらの三次元的な発達であった²²⁾。それらは歴史的・社会的な環境におうじて建設されたり、崩壊したり、修理されたり、また次節で述べるように合併したりもした。平面的な二次元的な空間における変化を、時間軸に沿って繰り返したのである。そして、その変化に対応して、その内部の社会システムも変化を繰り返した。

現在、狭義の圩子および圩子に囲まれた水田等は約 48 万畝 (= 約 320 万アール)、常熟市の総耕地面積の約 50%を占めており、その存在範囲は水エリアと一致する。それらは水路でつながっており、またその内部にも水路が整備されている。洪水のときには、市長が主要な水路の水門の開閉をおこない、主要な水路から枝分かれし、狭義の圩子に囲まれた水田等へと通じる水路の水門の開閉は、その内部の水管理をおこなう水利組織がおこなうという²³⁾。

3-2 「圩子」という呼称について

3-2-1 「圩」の一般性

前節でのべたように、圩子とは、狭義には水田や低地の周りの堤のことをさす。つまり、クリークをふくめた水路と水田や低地などとの境界に築かれた堤のことをさす。いっぽう、圩子に囲まれた水田は「圩田 (wei-tian)」、圩子および圩子に囲まれた水田や低地などからなる地区は「圩区 (wei-qu)」と呼ばれている²⁴⁾。この圩区は、低い窪地にある、すこし高いところにある、川沿いにある、といった圩区内部の高低差にもとづく地形的特徴におうじて、灌漑・排水における水の流れを調整し管理するために、いくつかが合併することも頻繁にあった。この合併したものは、「聯圩 (lian-wei)」、「併圩 (bing-wei)」などと呼ばれる²⁵⁾。

いずれの場合も「圩」がつかわれている。序章でのべた「塘」に

も、池や低湿地の意味だけでなく、堤の意味もある。が、常熟市旧城の東側をながれる青墩塘や、東南側をながれる白茆塘などの固有名詞以外では、やはり「圩」がつかわれている²⁶⁾。すなわち、湖、沼、沢に関しては、水田や低地の周りの堤、圩子に囲まれた水田、圩子および圩子に囲まれた水田や低地などからなる地区、それらが合併したもの等、一般名詞に対しては一般的に「圩」がつかわれると考えられる。

3-2-2 広義の「圩子」

しかしながら、現地においては、どのような文脈でも、つねに「圩子」という口語的な呼称がつかわれていた。つまり、堤をさす場合、田をさす場合、地区などの単位をさす場合のいずれに対しても、「圩子」という呼称がつかわれていたのである。そして、地区単位としての「圩子」は、行政単位とはちがうが、おなじになる場合もあり、いずれの場合でも、水利組織や管理システムなど、その単位に対応した社会システムもそこには存在する。たとえば、現地調査をおこなった水エリアの天潭・横河集落には、堤という意味の狭義の圩子に水門が設けられている。それは、行政単位である珠涇村に納められた水利費によって維持され、約 10 年に一度つくりかえられている²⁷⁾。水門を専門に管理する人はいないが、なにかあれば各戸が水門を開閉して水位を調整する。つまり、このような管理システムの水利組織が存在している。いっぽう、この集落には水を汲み上げるためのポンプもある。ポンプの場合は、各戸が旧村単位の水利組織に管理費を納め、その費用からポンプの電気代や管理をおこなう専門の電気工の給与を支払う、という管理システムをとっている。

以上より、堤をさす狭義の「圩子」以外の意味を示す場合は、「圩子」という一語ではなく、総称としての「圩」に接尾字の「子」がついた「圩子」だと考えることができる。この考え方はもちろん、狭義の「圩子」に対しても当てはまる。そのため、「圩子」とは「水田や低地の周りの堤や、その堤に囲まれた水田や低地、あるいはその地区などの単位、およびその単位に対応した社会システム等を総称した呼称である」、すなわち「クリークをふくめた水路と水田や低地などとの境界に築かれた堤、その水路や堤に囲まれた水田や低地自体、あるいはその水路や堤によって囲まれた地区などの単位、およびその単位に対応した社会システム等を総称した呼称である」と、広義にとらえられるものである。

3-3 圩子の文化的・社会的側面

3-3-1 水環境の文化的継承と社会的関係

広義の圩子は、沼や沢が発達した低湿地に、それらを囲むように堤を築く、つまりは狭義の圩子を築くことによって成立するものである。そして、そのことにより、常熟の水エリアの水環境は創出されてきた。逆にいえば、この水環境を創出するために、狭義の圩子を築くという技術が継承されてきたとも考えられる。すなわち、この水環境は、圩子を媒介に、圩子という空間によって継承されてきたと考えられる。

また、広義の圩子も、前々節でのべた、歴史的・社会的な環境におうじて建設されたり、崩壊したり、修理されたり、合併したり、平面的な二次元的な空間における変化を時間軸に沿って繰り返した狭義の圩子および圩子に囲まれた水田とおなじく、歴史的・社会的な環境におうじて、かたちを変えながら三次元的な発達を遂げてきた。1968 年~1973 年におこなわれた聯圩の規模の調整にみられ

るように、政治的な制度におうじて、それは合併統合したり分割分散したりしたこともあった²⁸⁾。つまり、狭義の圩子によって、広義の圩子とくにその水環境という単位を有する社会集団の関係が変化してきた。そして現在、小さな圩子が集まって大きな圩子(大圩)を形成しているところもある。すなわち、常熟の水エリアの水環境は、圩子を媒介に、圩子という空間によって関係づけられていると考えられる。

3-3-2 圩子を媒介とした水環境社会

以上のように、常熟の水エリアの水環境は、圩子の文化的・社会的側面によって、継承され、関係づけられている。

親族研究において、父系や母系といった表現にみられるような、父や母など親族を構成する要素の関係性ではなく、継承による関係性に注目し、「社会組織の焦点として家の重要性」²⁹⁾を指摘したレヴィ=ストロースの「家社会」という概念³⁰⁾は、それまでの親族研究における前提を転倒させた。本章で考察してきたように、常熟をはじめとする江南の水郷地域の水環境についても、その水環境の継承による関係性がみられる。それは、水郷地域の水環境を創出し、それを構成する要素としての「水田や低地の周りの堤や、その堤に囲まれた水田や低地、あるいはその地区などの単位、およびその単位に対応した社会システム等を総称した呼称である」と定義される広義の圩子が、それぞれの意味において、文化的に継承されることによってもつに至った水環境の関係性のことである。

すなわち、常熟の水エリアでは、「社会組織の焦点としても、圩子によって創出され、圩子によって構成される水環境の重要性」が指摘できる。そのため、「家社会」という概念をアナロジー的に援用すれば、常熟の水エリアの水環境とは、圩子を媒介とした「水環境社会」である、というとらえ方ができよう。

図2 水エリアの住居および住居群の構成の仕組み

4. 住空間および地域空間の構成と変化の仕組み

ここでは、2. で明らかにした、住空間からみた地域空間の構成と変化がいかに規定されてゆくか、その仕組みについて考察する。そのために、2-3で示したⅠとⅡに対応したかたちで水エリアと緑・土エリアにわけたうえで、3. で示した「水環境社会」という圩子に関する解釈との関係から考察してゆく。

4-1 住空間の構成を規定する概念

考察にあたっての前提条件として、中国あるいは調査対象地域の住空間の一般的な特徴としてあげられる、以下の5つの規定概念をもちいる³¹⁾。

- A. 住居は南向きである
(絶対方位にしたがう)
- B. 住居は近くの水路あるいは道路の方向にしたがう
(相対方位にしたがう)
- C. 住居は水路および道路に接する
- D. 住居どうしは隣接する
- E. 住居群の配置には規則性がある
⇒ E₁. 一直線上に配置 (線的)
E₂. グリッド上に配置 (面的)

4-2 住空間の構成と変化の仕組み

(1) 水エリア

水エリアの特徴的な状況である、住空間の構成を規定する条件は、以下の3つにまとめられる。

- ①狭義の圩子もふくめ、その内部においては線的な水路が多く、水路網によって囲まれた面的な土地、つまり広義の圩子が広がっている。そのため、狭義の圩子およびその内部の広義の圩子内にある水路沿いには、近年の「都市化」やそれを促す計画、とくに道路計画がなされているいっぽうで、現在なお住居建設が可能な敷地が多い。
- ②この面的な土地、つまり狭義の圩子に囲まれた広義の圩子は、方形で、絶対方位に正対していることが多い³²⁾。
- ③豊かな水環境をもつ「水環境社会」が継承されており、管理等に関する社会システムがゆるやかに存在している³³⁾。そして、水路の使用頻度は現在でも高い。

ここに住居を建設する場合、絶対方位にしたがうことにより、規定概念はA>Bとなる。いっぽう①、②より、絶対方位にしたがいつつ、相対方位にもしたがうものがあることから、A=Bとなる場合もある。これらにCが作用し、住居は、

$$\text{住居: } (A \geq B)/C \quad \text{注34)}$$

という条件で規定される(図2の上)。このように規定された住居を中心に住居群を建設していく場合、規則性Eのもとで、CとD両方が作用する。すなわち、住居群は、

$$\text{住居群: } \{(A \geq B)/C\} + \{(C+D)/E\}$$

の条件で規定され(図2の下)、その結果E₁になる。水エリアでは、この住居群が1つか2つ集まって集落を形成している。したがって、集落は変数nをもちいて、

$$\text{集落: } n \left[\{(A \geq B)/C\} + \{(C+D)/E\} \right]$$

の条件で規定される。これをE₁(n)とあらわせば、集落群は、

$$\text{集落群: } \Sigma E_1(n)$$

で規定され、結果、規定条件①、③より、線的な構成E₁になる。

(2) 緑・土エリア

緑・水エリアの規定条件は、以下の3つにまとめられる。

④ 圩子とは関係のない水路が、地形の影響を受けて通っている。

⑤ その水路とほぼ平行に道路がつくられ、その数は増加している。

⑥ 水路の使用頻度は現在、低くなっている。

これらの地形条件を考慮しつつ、水エリアの場合と同様に各空間を規定する条件をもとめれば、以下のようになる。

1) 絶対方位にしたがい、面的な構成がみられる場合

(これまでの緑エリア)

住居 : $(A > B) / C$

住居群 : $\{(A > B) / C\} + \{(C < D) / E\} = E_2$

集落 : $n \{[(A > B) / C] + [(C < D) / E]\}$
 $= E_2(n)$

集落群 : $\Sigma E_2(n) = E_2$

2) 相対方位にしたがい、線的な構成がみられる場合

(現在、変化しつつある緑エリアと、土エリア)

住居 : $(A < B) / C$

住居群 : $\{(A < B) / C\} + \{(C + D) / E\} = E_1$

集落 : $n \{[(A < B) / C] + [(C + D) / E]\}$
 $= E_1(n)$

集落群 : $\Sigma E_1(n) = E_2$ (∵ ⑤, ⑥)

2. でみたように、道路に沿って住居がつくられる場合は相対方位にしたがい、そのとき住居群は線的に構成される。このことをふまえて、上記の規定条件をみれば、住居と住居群は、1) から2)へと変化していることが理解できる。また集落群は、1) でも2)でも E_2 になり、集落群は面的な構成へと変化していることが理解できる。

4-3 地域空間の構成と変化の仕組み

水エリアの住空間は、狭義の圩子にもとづいている。絶対方位にしたがい、水路に沿った線的な構成で、前節(1)で示したような仕組みによって規定され、生産され、継承されてきた。ここでは水を媒介とした社会システムがゆるやかに存在しており、この水路は現在でも使用頻度が高いが、両者は相互作用の関係にあると考えられる。この相互作用の関係が成り立つ領域は、集落にある場合もあれば、3-2-1で述べたように、圩子の合併によって、もっと大きな空間レベルにある場合もある。3-3-2で示したように、このような関係が成り立つ領域をまとめて「水環境社会」ととらえることができるが、この広義の圩子を媒介とした水エリアにおける「水環境社会」も、上記のような仕組みをもつ住空間によって規定され、生産され、継承されてきたのである。そして、これによって、この水環境は規定され、生産され、継承されてきた。すなわち、水エリアにおいて、狭義の圩子にもとづく住空間の構成と、広義の圩子を媒介とした「水環境社会」は、前節(1)で示したような仕組みの相互作用という関係によって再生産³⁵⁾されており、これにより、この水環境も再生産されてきたと考えられる。

いっぽう、緑・土エリアにおいては、圩子とは関係のない水路や道路が住空間の構成を規定しており、前節(2)で示したような仕組みによって、両エリアにおける住空間の構成は変化している。そして、そのことにより、緑・水エリアの水環境も変化していると考えられる。

常熟の地域空間は現在、以上のような住空間の構成と変化の仕組みをもつたつのエリアによって構成されている。すなわち、ここで示した仕組みによって生成する各エリアの住空間の構成と水環境が、常熟の地域空間と水環境も生成、構成している。常熟の地域空間の構成と水環境は、このように変化しつつ再生産されている。

5. おわりに

本稿では、水郷地域と呼ばれる中国江南に位置する常熟を対象として、常熟の住空間および地域空間の構成と変化の実態を把握し、また水環境を創出する「圩」に着目して、その口語的な「圩子」という呼称に関する解釈をした。そのうえで、構成と変化の実態と圩子が創出する水環境との関係から、常熟の住空間および地域空間の構成と変化の仕組みについて考察した。

その結果として、以下の4点が明らかになった。

- I. 既往研究にみられる水エリア、緑エリア、土エリアという常熟の地域空間における3つのエリアは、現在、実態として、住空間の構成が不変である水エリアと、住空間の構成が変化しつつある緑・土エリアにわけられる。水エリアの住空間の構成は、絶対方位にしたがい、水路に沿って線的な構成である。緑・土エリアでは、住居・住居群は相対方位(道路)にしたがう線的な構成へ、集落の拡大により集落群は面的な構成へと変化しつつある。
- II. 水エリアのみにみられる「圩子」とは、総称としての「圩」に接尾字の「子」がついた「圩+子」であり、狭義には、水田や低地の周りの堤を指す呼称である。また、広義には、その堤やその堤に囲まれた水田や低地、あるいはその地区などの単位、およびその単位に対応した社会システム等を総称した呼称である。そして、この水環境とは、圩子を媒介とした「水環境社会」である、というとらえ方ができる。
- III. IとIIの関係から、水エリアにおいては、狭義の圩子にもとづく住空間の構成と広義の圩子を媒介とした「水環境社会」が、相互作用の仕組みによって再生産され、そのことにより、この水環境も再生産されている。いっぽう、緑・土エリアにおいては、圩子とは関係のない条件が作用する仕組みによって、住空間の構成は規定されている。両エリアにおける住空間の構成は変化しており、水環境もそれによって変化している。
- IV. 常熟の地域空間は現在、以上のような住空間の構成と変化の仕組みをもつたつのエリアによって構成されている。すなわち、このような仕組みによって生成される各エリアの住空間の構成と水環境が、常熟の地域空間と水環境も生成、構成している。常熟の地域空間と水環境は、このように変化しつつ再生産されている。

以上のように、本稿では、中国常熟の圩子という文化的に継承されてきた社会システムにも関係する呼称についての解釈をおこない、それと住空間および地域空間の構成や変化の実態とを結びつけることによって、空間の構成と変化の仕組みというダイナミズムについて考察した。

今後は、本稿で明らかにした住空間および地域空間の構成や変化、その仕組みというダイナミズムと、その住環境、地域環境および水環境を創り出す、そこに住まう人びとの実践との関係について、さらなる現地調査にもとづいて考察してゆくことが課題である。

注

- 注 1) 文献 4) p.14 より引用。
 注 2) 文献 5) p.282 より引用。
 注 3) 水環境の構成要素については、文献 4) pp.14-17 を参照した。
 注 4) () 内は、中国語の表音文字で表記。
 注 5) 現地調査は、2001 年 8 月および 2002 年 8~9 月におこなった。
 注 6) 中国江南の水路と道路の近年の状況については、文献 6) を参照。
 注 7) たとえば、文献 7)~8) などを参照。
 注 8) 文献 9) を参照。
 注 9) 文献 10) を参照。
 注 10) これに対して、人類学等の分野では、文化的に継承されてきた社会システムとしての「伝統」や「慣習」自体に焦点をあてて、それらについての解釈をおこなっている研究もみられる。とくに、空間を対象にしたそのような研究としては、文献 11), 12) などを参照。
 注 11) 詳細は、3. で述べる。
 注 12) 文献 13), 14) などを参照。
 注 13) 発生構造主義とは、ブルデューが自身の練り上げようとしている研究に対しておこなったレッテル貼りであり、その背後には「構造主義の持つ根本的に反発生論的な志向に対して（中略）、性向の発生（中略）というものを再び導入しようとの配慮」（文献 15） p.27 より引用）がある。
 注 14) 文献 16) 「名城常熟」より引用。
 注 15) 李京生氏自身の教示による。なお、以下に示す各エリアの特徴については、李京生氏へのインタビュー結果と、さらには現地調査時に常熟全体における水の流れ方、流量、水質等の調査も、常熟の地域空間内でポイントを決めて網羅的におこなったが、そのときの調査結果にもとづいている。
 注 16) 李京生研究室では、「工業エリア」としているが、畑地が多いことと、緑エリア、水エリアという略称の対比から、「土エリア」とした。
 注 17) 以下、村名および集落名の後には、エリア分類を表す記号として、緑エリアは(1)、土エリアは(2)、水エリアは(3)をつけることにする。
 注 18) もちろん、すべてが真南を向いているわけではない。たとえば、図中に示したように、東南にちかい向きの住居もみられる。しかしながら、ここでは、現地調査時のインタビューによって得られた現地の人のびとの意識にもとづき、南向きとした。なぜなら、本稿では、序章で述べたように「人間と人間が創り出す（地域）環境との関係」という視点を考慮しているからである。以下で示す住居の向きも、同様の判断によるものである。
 注 19) 文献 17) p.1920 より引用。なお、「囲子」も (wei-zi) と発音し、「圩子」とは、声調もなじである。
 注 20) この雛型については、文献 13) p.75 を参照にした。
 注 21) ここでの記述については、文献 14) p.198 から得られたことである。
 注 22) この発達の様子については、文献 13) pp.75-84、文献 14) pp.199-201 に詳しく述べられている。
 注 23) 常熟市城市規劃局でのインタビューにもとづく。
 注 24) 文献 13) および 14) を参照。なお、「圩田」に関しては、注 19) とおなじく、「囲田」という表記もみられる。
 注 25) *Ibids.* 1982 年、常熟市には 100 の「聯圩」があった（文献 13） p.84）。
 注 26) 旧城の東側には、「湖圩」という呼称の湖もある。
 注 27) 珠涇村村民委員会および集落でのインタビューにもとづく。
 注 28) 圩子の合併統合状況や分割分散状況については、文献 13) pp.75-84、文献 14) pp.199-201 に詳しく述べられている。
 注 29) 文献 12) p.172 より引用。
 注 30) 文献 12) pp.170-198 および文献 18), 19) を参照。「家社会」という概念は、親族を前提に語られていた従来の親族研究に対し、継承による関係性に注目することによって、双系など、これまでの親族研究で十分には説明できなかったことに対しての説明を可能にした。
 注 31) ここであげた 5 つの規定概念のうち、A については、中国の住居に関する概説書などの文献および現地調査時のインタビューにもとづいている。B~D は、現地調査時のインタビューにもとづいている。E は、現地調査とくに実測調査によって得られたデータにもとづいている。
 注 32) 文献 13), 14) に描かれている圩子の図面を参照。
 注 33) 珠涇村村民委員会でのインタビューにもとづく。
 注 34) $\wedge C$ とは、「規則性 C のもとで」という意味をもつものとする。なお、ここでの $A \geq B$ を、論理記号をもちいて表現すれば、道路または水路が東西軸と平行でないとき ($A > B$) には、 $A \wedge \neg B$ 、
 平行のとき ($A = B$) には、 $A \wedge B$

となる。両者をあわせて表現すれば、

$$(A \wedge \neg B) \vee (A \wedge B) \Leftrightarrow A$$

となり、($A \geq B$) $\wedge C$ は、

$$A \wedge C$$

となる。

しかしながら、仕組みというダイナミズムとしての上記の内容をよりの確に表すために、

$$(A \geq B) \wedge C$$

という表現をもちいることにする。

- 注 35) ここでいう「再生産」とは、従来とまったくおなじものが再び生産されるという意味だけではなく、「差異化をふくむ再生産」（文献 20）参照）のことであり、後述するような「変化しつつ再生産」されている状態もふくんでいる。

引用文献

- 1) 栗原伸治、糸長浩司：中国常熟の wei-zi に関する一解釈、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp.625-626, 2002.8,
- 2) 桑原志乃、栗原伸治、糸長浩司、川口友子：水路と道路との関係からみた住空間の構成と変化—中国常熟の住空間および地域空間の構成と変化—その 1、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp.581-582, 2003.9
- 3) 栗原伸治、糸長浩司、桑原志乃、川口友子：地域空間の構成と変化とその仕組み—中国常熟の住空間および地域空間の構成と変化—その 2、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp.583-584, 2003.9
- 4) 何振球、嚴明：常熟文化概論 吾文化的定点研究、蘇州大学出版社 蘇州、2001
- 5) 時萌：虞山文化紀事、山西古籍出版社 太原、2001
- 6) 李京生、糸長浩司、青木志郎：上海近郊農村地域の水鎮集落空間の変化と新村計画の問題、農村計画学会誌 14 巻 1 号, pp.8-19, 1995.6
- 7) 高村雅彦：舞台及び演劇空間の構成について 中国江南の水郷都市研究 その 1、日本建築学会計画系論文集 第 473 号, pp.159-167, 1995.7
- 8) 高村雅彦：鎮の都市構造と住居形式の関係について 中国江南の水郷都市研究 その 2、日本建築学会計画系論文集第 481 号, pp.177-186, 1996.3
- 9) 王郁、三村浩史、東樋口護：水郷都市・蘇州における旧市街地の歴史的空間形態の変容分析—計画経済期（1949~80' S）について—、日本建築学会計画系論文集 第 505 号, pp.119-124, 1998.3
- 10) 盧永春、鈴木充、三浦正幸：清代の江南地方の水辺都市空間 『盛世滋生図』に見る蘇州とその近郊における考察、日本建築学会計画系論文集 第 506 号, pp.177-184, 1998.4
- 11) 佐藤浩司（編）：住まいをつむぐ、住まいにつどう、住まいはかたる、住まいにいきる（シリーズ建築人類学<世界の住まいを読む>①~④）、学芸出版社、1998~1999
- 12) ウォータソン、R.（著）、布野修司（監訳）：生きている住まい 東南アジア建築人類学（*The Living House : An Anthropology of Architecture in South-East Asia*）、学芸出版社、1997(1990)
- 13) 常熟市水利志編纂委員会：常熟水利志、水利電力出版社 北京、1990
- 14) 陳仁端：中国太湖流域における「圩田」に関する考察、日本大学総合研究所（編集）『水環境と人間』、pp.197-214, 2000
- 15) ブルデュー、P.、石崎晴己（訳）：構造と実践（*le sens pratique*）、藤原書店、1991(1987)
- 16) 李建炯（主編）：中国歴史文化名城・常熟、古吳軒出版社、2001
- 17) 愛知大学中日大辞典編纂処（編）：中日大辞典 増訂第二版、大修館書店、1989
- 18) Levi-Strauss, C. : The Social Organization of the Kwakiutl, In *the Way of the Masks* (trans. Modelski, S.), University of Washington Press Seattle, pp.163-187, 1982
- 19) Levi-Strauss, C. : Clan, Lineage, House, In *Anthropology and Myth : Lectures 1951-1982* (trans. Willis, R.), Basil Blackwell, pp.151-194, 1987
- 20) ブルデュー、P. & パスロン、J. C.、宮島喬（訳）：再生産〔教育・社会・文化〕（*LA REPRODUCTION elements pour une theorie du systeme d'enseignement*）、藤原書店、1991(1970)

付記

本稿は、科学研究費補助金による「地域用水整備に伴う集落アクションと水利組織の再編に関する研究」（基盤研究(C)(2)、平成 13~14 年度、研究代表者：岡本雅美元日本大学教授）の一環である。共同研究者であり、現地調査を共同でおこなった石川重雄日本大学教授と長坂貞郎同専任講師、研究協力者である李京生同済大学教授、董明同講師、同大学院生の陳琨氏、郭超氏、楊辰氏、ならびに、常熟市の城市規劃局、水利局、環境局、珠涇村村民委員会をはじめとする関係各氏、各機関に感謝を申し上げます。

(2003 年 6 月 9 日原稿受理、2004 年 6 月 28 日採用決定)